

2013年度卒業論文紹介

門 江厘奈

修道院治療学

中世ヨーロッパの修道院で育てられたハーブなどの薬草によって医療の発達が促され、現代にまでその技術と知識が受け継がれているものもある。明治維新以来日本の医学と自然科学の手本となったドイツをとおり、日本にも一部それが伝えられた。

キリスト教信仰が生活規範の中心にあった中世ヨーロッパにおいて、修道院は学問・文化活動の拠点であった。修道院は、修道士がイエス・キリストの教えに倣って、祈りと労働のうちに共同生活するための施設であり、自給自足で生活を行っていた。その中で修道士たちが農業や医療などにおいても新しい技術を生み出した。本稿ではその中で修道院治療学について調べてみた。

修道院では信仰が何よりも重要であった。そこでは一般民衆のために魂を癒す心の治療が行われていた。それとともに修道院の庭では薬草が育てられ、様々な薬草の効果を研究し病の治療へと役立てられた。修道院治療学とは、ヨーロッパに古くから伝わる薬用植物を利用した自然療法についての学問である。修道士たちは次第に医術に精通するようになった。まず、古い文献を収集し忠実に書き写して保存することで医学的知識を後世に伝え、また、遠い異国の布教先で珍しい薬草を手に入れて持ち帰ることで、修道院の薬草園には薬効の優れた薬草の数が増えていった。ロルシュ修道院をはじめ、今日のドイツ西部に当たる地域の修道院はすでに9世紀には多数の医学関係の写本を所有していた。

ドイツには中世から現代にかけて、多くの人が医学に貢献し、また多くの書物も残されている。中世ベネディクト会女子修道院長であるヒルデガルト・フォン・ビンゲン（1098～1179）は、中世ヨーロッパ最大の

賢女と呼ばれ、宗教者としてだけではなく、政治や芸術、そして医学など様々な分野において活躍した。彼女が書いた『病因と治療』や『自然学』から、今なお医師や栄養学者など多くの人々が知識を得、刺激を受けている。また、795年にロルシュ修道院で書かれた『ロルシュ医学書』は、ドイツで書かれた現存する最古の医学書であり、2013年6月に世界記録遺産に登録された。さらに、ハイデルベルクにあるドイツ薬事博物館は、世界で最大規模の展示を誇る。そこでは古代から20世紀に至る薬事の歴史と進歩が紹介されており、薬事の歴史を今に伝えている。

修道院治療学は薬草学へと発展し、現在の植物自然療法へと進化していった。しかし、近代以降、即効性のある化学的医薬品の発達や医学技術の進歩とともに、植物療法をはじめとした伝統療法は次第に影をひそめていった。それでも今日では副作用などの問題から近代医学の薬を使った治療を見直し、自然で穏やかな療法へ立ち返ろうと考える人も一方で増えている。また、近代医学と伝統医学のそれぞれの得意分野を活かした「統合治療」が世界的に活発になっている。

ヨーロッパの民間薬の知識は、これまで日本にはあまり伝わっていなかったが、近年、様々な西洋の植物自然療法が紹介されるようになり、とくにアロマテラピーは日本においても普及が進んでいる。ドイツでも薬草魔女（Kräuterhexe）と呼ばれる薬草の知識のある人々が重宝され、ヨーロッパの地でさらに薬草の知識を広めることに貢献している。

中世の修道士たちが、修道院間で自分たちの経験を分かち合い、貴重な種や苗を交換したことによって、地中海のさまざまな植物を現在のドイツでも手に入れることができる。歴史の中で何度も失われようとしていた古代の学者たちの医学知識は、修道士たちによる多数の写本によって守られてきた。修道士が育ててきた薬草園や、語り継いできた医学書によって、現代にもこうしてハーブの知識が受け継がれているのである。

北垣 里那

ドイツビールと日本ビール
—その歴史と関係について—

日本にビールが始めて醸造されたのは、まだ明治時代が始まったばかりのことと思われる。1994年にビール製造免許の規制が緩和されたあと、所謂、地ビールブームが起こりつつある。2011年、日本国内のビール消費量（ビール・発泡酒・新ジャンルの合計消費量）は約560万 kl であり、世界第7位であった。ビール消費には社会的に全く問題がないとは言い難い。しかしだからこそ、ビールは研究する価値のある大きな社会的現象であるのは確かであろう。最近、関西大学の研究業績データベースにおいてもビールというテーマが現れ、その時局性を例証している。

論文の結果として、ドイツビールの日本ビールへの影響を明らかにできた。ドイツ学専修の立場から見ると、ドイツ語圏と日本という両文化圏の相互関係を明白にしようとする研究アプローチは、両文化圏の社会に対して非常に役に立つのではなかろうか。